
召喚されてみたものの

紫堂 涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚されてみたものの

【Nコード】

N7454Y

【作者名】

紫堂 涼

【あらすじ】

召喚されてみたものの、召喚した人間から逃げ回ることを決意。厄介事から逃げて何が悪い！
果たして彼女は召喚者から逃げ切れるのか。

第1話 銀色の光

ふわり、ふわりと柔らかな銀色の光が周りを取り巻く。

重力に逆らうように、ゆっくりと暗闇を降りてゆく私を慰めるように、その光は暖かで、近づいたその光をそっと慰撫するように撫でると、喜んだように光は光度を上げる。

形無きそれらに愛おしさまで感じ、小さく笑みを浮かべ手に触れた光にそっと口付けると、ほわりと薄紅の光を一瞬纏ったそれは、慌てたように傍を離れ、おずおずとまた近づいてくる。

現実には有り得ない光景。それなのに、不安に思わずにいられるのは、この光たちのおかげだろう。

ふわり、ふわりと光と戯れながら永遠とも思える降下の先に足が、地に付く。

ザアアア……と、黒と銀に溢れていた世界が、不意に鮮やかな彩りに変化する。先ほどまで漆黒だったはずの地面は、柔らかな草と土に変わり、光射す空は青く澄み切っていた。

見たこともない風景のはずなのに、何故か懐かしく感じる。そして変わらず、私の周りを取り巻く数多の銀色の光。

心配するように、ふわふわと顔の回りで浮いている光をそっと撫でると、嬉しそうにふわふわと上下するのに、やはり自然と笑みが浮かぶ。

私が最後に笑ったのは何時の日だろう。

不意に無表情になった私に驚いたのか、あわあわと焦ったように点滅する光に、苦笑して心配ないよと、優しく撫でて笑みを浮かべる。

こんな風に、ただ愛しいと思える存在を得たのは初めてだった。これらがどんな存在なのかも判らない。だが、純粹に自分を慕って

いるのだけは、肌で、心で感じられるから。

ずっとこの光と戯れていた気持ちは抑え、そつと首をめぐらせるが、そこにはただ雄大な自然が広がっているだけで、他の生き物の気配が欠片もなかった。

昔から気配には敏かったが、今はそれがさらに研ぎ澄まされているのが判る。他者の気配だけではなく、自然に生きる生物たちの気配までも、読み取れるほどの感覚をさらに広げてゆくが……何もひつかからない。ただ、自分の傍にいる光だけが唯一の気配だった。

「ん……取り合えず、どこへ行けば良いのかな？」

呟きに応えるように、ピツと今まで好き放題に漂っていた光が整列し、こつちこつち、と呼ぶように向かうのに素直に付いてゆくとそこにはどこまでも透き通った泉が見えてきた。

底まで見えそうな泉を覗き込むと……透けた先には見えるはずの底ではなく、なぜかこちらを覗きこんでいる顔が見える。あちらからはこちらが見えていないのか、真剣な瞳で泉を覗き込んでいる男はやけに見目麗しき顔をしている。女性的ではないものの、精悍な顔の中、瞳だけに苦渋を滲ませている男の年は、見たところ30代も半ばだろう。何事かを呟いているその唇は、女性であれば触れてみたいと思うほどだろう。……私を除いて。

今までの人生で、男というものに一切の期待を抱いていないせい、か、男性的な魅力が滴るほどの彼にも興味を持たず、ただ何をこんなに苦しそうなんだろうなと、のんきに思っていると、その疑問を呟いてしまったのか、回りの光がまたピツと光ると、今まで葉のざわめきしか聞こえなかった耳に、突然声が聞こえ始める。

『……なぜ、なにも変化がない』

低く、ぞくりとくるような声に自然と背が伸びる。唇の動きからして、こちらを覗きこんでいた男のものだとすぐに知れた。

『陣は光り、召喚は成されたはずですが……泉から、何も現れませ

んね……」

困惑したように呟くその声は、男の背後に立っている麗人から漏れた。

『陽の神と、月の神が並ぶ日に召喚を行えば、求める物が現れるのではなかったか？』

声を荒げてなどいないのに、ずしりと響く声には抑えきれない焦燥が滲んでいた。

何一つ動じることなどなさそうな目の前の男が、こうも焦りを露にしているのが意外で、ことりと首を傾げてしまう。

何となく、何となく、自分がこの泉に入ってしまったえばいいのだろうとは判っているものの、目の前の二人はどうみてもお知り合いになりたくない存在で。

意識的に目を向けないようにはしているものの、精悍な男が身に纏っている装束は一般的とはいえないような豪華なもので、その後ろに立つ麗人もまた、シンプルでありながらも、生地の高さが泉越しにでも伺えるものだった。

『……っ、召喚できねば、あの狂った竜はどうなる！！』

とつとつ声を荒げた男が、苛立ったように泉に手を伸ばすと、波紋でゆらゆらと男の姿が歪む。

あ、ちよつと面白い。誰もが口を揃えて美形というだろう二人が変な顔になって、ついくすくすと笑ってしまう。こうしていながらも、実際目の前に二人がいたら、自分は能面のような表情になってしまうんだらうなあと自嘲しながら、少しでも情報を拾うために耳を澄ませる。

『最早あの竜から理性は失せた。召喚が失敗したのなら……手にかけるしかないのだろう！』

決してそれを望んでいないのだろう、男が初めてその表情を歪ませる。無意識にその頬に手を伸ばしそうになるが、はっとしたように己の胸元に手を戻す。

だめだだめだだめだ…下手な同情は身を滅ぼす元だ。冷静に、冷

静に…と己に言い聞かせているうちに、ようやく諦めたのか、泉の底から人の気配が失せ、何も無い空間だけが広がっていた。

「ん……？」

早く、早く、と言うように自分の周りでくるくる回っている光の一つに手を伸ばし、手のひらにのせる。

「あそこに行つて欲しいの？」

そうそう、と上下にひよこひよこ動く。

(ああ……可愛い、もって帰りたい……)

そこまで考え、ようやく思う。ここはどこだ。

冷静なようで、実際はそうじゃなかったんだなあ……と自己分析しながらも、色々知つてそうな光に問いかける。

「ここは、私の世界じゃないよね？」

びよこり、と上下。

「ちゃんと戻れるの？」

その言葉に、ほわほわ浮いていた光の全てが、ぴたりと動きを止める。悲しそうに光を弱め、申し訳なさそうに寄り集まり、こちらをじつと伺っている。

「無理……なのね？」

擦れた声で、真偽を問う。

ひよこり、と今度は元気なく光が跳ねる。

「私を呼んだのは、あなた達……？」

再びひよこり。

「……そう……」

ぼつりと呟き沈黙すると、必死に誤ろうとしているのか、慰めようとしているのか、おずおずと近寄ってきてはそつと撫でてくる。

「そっか……」

暫く瞳を閉じて、心を落ち着ける。力尽きるまで泣き叫ぶ元気もなくなっていたが、何よりも、戻れないことに喪失感を感じるものの、どこか安堵していたから。

「あなた達は、ずっと私の傍に居てくれるの……？」

歪んだ声で問いかけると、勿論だとばかりに必死にぴよこぴよこ跳ねる。

「なら、良いわ」

戻ったところで、私が大切に思う存在はとうに無い。父も母も失い、他人からは美しいと言われるこの姿故に友人も出来ず、ただ一人、自分を表面ではなく見てくれたと思った人は、別の女性の手を取った。淡々とただ、仕事をして、一人きりの部屋に帰り眠る。その繰り返しの生活。暖かさを感じることも無く、楽しいと笑うこともなく、ただ生を消費するだけならば、何かの役に立てる場所で生きて行けば良い。ただ、一人は寂しい。見慣れた風景も、執着は無くとも馴染んだ場所もない世界で、ただ一人立ち続けるのは寂しすぎる。

だけど、ただひたすらに自分を愛しむようなこの光たちが傍にあるのなら、今こうしているように笑える気がする。ならば、良い。

第2話 漆黒の竜

しばらく黙りこんだまま考えていた自分を氣遣ってか、そっと寄り添っていた光を撫でる。まだ心配そうに伺っているそれらに優しい笑みを浮かべると、そっと立ち上がる。

見下ろした泉に移る部屋はもう、完全に閉じられてしまったのか、先ほどまでは残っていた灯りさえ消されていた。

「竜に、会えば良いのね」

先ほどの二人の会話から、自分が竜のために呼ばれたことは理解できていた。ちよつと迷うようにしながらも、ひよこり、と跳ねた光に、なら案内して?と告げ、躊躇無く泉に身を躍らせる。

濡れてしまうのかと思えば、先ほど闇の中を下降していたように、ゆっくりと何も無い空間を落ちてゆく。だが傍には同じく銀色の光たち。笑みさえ浮かべてそのまま沈んで行くと……ひとり、と今度は冷たい床の感触。

暗い室内を、銀色の光で見渡せば、そこは神殿のようだった。温かみの感じられない石造りの建物の中、光に導かれるように歩を進める。

部屋にいたところを呼び出されたせいで、足の先から冷たさを感じる。ぶるりと身を震わせると、ほわりと銀色の光に包まれ、柔らかな暖かさを感じる。

「有難う」

笑みに喜ぶように、身を包む光がさらに暖かくなる。正直な反応に微笑みながら、竜の元へと告げると、光が困惑したように明滅する。

「ん?もしかしてさっきの二人に会って欲しいとか?」

おずおずとつなずくように、自分を包む光が上下する。

「でもねえ……お近づきになりたくないのよね……」

厄介ごとの氣配しかしないのだ。自分が竜のために呼ばれたのな

ら、その竜にだけ会って、どこかであとはひっそりこの子達と暮らしたいのだ。有難いことに言葉が理解できるのは先ほどの件で知っている。言葉さえ通じるのなら、あとは何とかできるだろう。

「用件だけ済ませてさっさと去っちゃダメ…?」

お願い、と告げると、どうしよう、どうしようと光がふわりと離れ、うろつろつと彷徨う。

「竜にだけ会って、私ができることをしたら…あなた達だけとひっそり生きたいんだけど…」

願望を口にすると、ピツと嬉しそうな気配が辺りを取り巻く。本来ならあの二人に会わないといけないのだろう、少し迷う動きはするもの、私の提案が嬉しいのか、ご機嫌にピンクに色を染めたりしながら、ふわんふわん動く。

(うつつ…可愛い)

どうしてこうまで好かれているのかは謎だが、一切の悪意を感じないこの子達と居るほうが絶対自分のためだ。というか自分の幸せだ。可愛いこの子達と戯れながら、少しずつこの世界を知って、生活して行く。竜などというファンタジーな生物もいるようだが、人間もいるなら町もあるだろう。言葉さえ通じれば、どうにかしてみせる。

生きるためなら何一つ良いことを運んで来てくれなかったこの容姿さえ利用する事に躊躇いはない。か弱い女性が涙ながらに頼めば、職を与えてくれる優しい人もいるだろう。などと、本当にか弱い女性なら思わない思考を廻らせ、もういちど畳み掛ける。

「私が欲しいのは平穏と、あなた達だけなんだけど…」

じっと光を見詰めていると、ふるふると震え始め、ほわりと薄紅色に染まり、ぼとりと床に落ちる。慌てたように掬い上げると、ぱつと浮かび上がり、やけに必死に上下にびよこびよこ動く。

(こ、これは了承してくれたのか、な…?)

今度はさあ行こう、早く行こうとばかりに光が先へ先へと促してくる。それどころか部屋から出て、長い回廊を歩いている間に人の

気配を感じて柱の影に身を寄せると、隠すように光が覆う。何度か人をやり過ごすうちに、光が隠してくれていると気付かれないのだと悟り、柱に身を隠すことなく光で全身を覆ったまま歩き出す。

一つだけ案内をするように光っている子は、先ほど床に落ちた子なんだろうなあと、気配で目が合うたびにほわりと薄紅に染まることでわかってしまう。

安心すると、回りを見渡す余裕ができてきて、すれ違う人々の姿をじっくり観察してしまう。

メイドのような姿をした女性達があちこちで働いており、制服をかっちり着こなした男性が一定感覚でいる。彼らは腰に剣を佩いていて、護衛のようなものだと感じた。全体的に意匠は中世と中華を足して割ったような感じで、建物ももちろんだが、ここが違う世界なんだなと肌で感じる。

自分は異質なもののだと痛感し、歩みを止めてしまいが、身を包む暖かさに、一人であっても、独りじゃないことを思い出し、顔を上げる。

再び歩み始めたその時、すぐ近くの扉が開き、先ほど泉越しに見た男が硬い表情で出てくる。そのまま足早にどこかへ向かおうとしていたのに、何故か自分のすぐ傍で立ち止まり、不審そうに此方に目を凝らす。

「……………」

互いに沈黙しながらも、だぐらだぐらとこちらは背筋を冷たい汗が伝う。蛇に睨まれた蛙のようにただ見上げるしかないまま息を詰める。

こうして傍で見ると、見上げていると首が痛いほどに男の背は高く、鍛えられた引き締まった身体なのが衣服の上からでも見てとれる。

じっと見詰めてくる薄茶の瞳は力強く、本当はこちらが見えてい

るんじゃないかと思うほどだった。視線が力チリと会うと、男が口を開こうとして……背後の扉の音に遮られる。

「陛下！お待ち下さい！！」

先ほどもいた細身の青年が目の前に呼びかける。

（陛下……陛下……やっぱり厄介ごとにしか思えない）

男を前にしてから少し迷うような気配をしていた光を、陛下と呼ばれた男が背後の青年に意識を取られた瞬間を狙い、さっさとこの場を過ぎ去るように促す。

何とか二人に近づかないように、壁際をじりじりと進み、通り過ぎると安堵のあまり小さく息をつく。すると、ヒュッ！と風を切る音と同時に、すぐ傍の壁に銀色の塊が突き刺さる。

ギ、ギ、ギ、とさび付いたように後ろを振り向くと、黒尽くめの男がいかに何かを投げましたとばかりの姿でこちらを見据えていた。

見えているわけではないのか、先ほどの陛下らしき人物と同じように訝しむような表情をしている。

困惑したような青年とは違い、陛下と黒衣の人物はまっすぐにこちらを見据えている。首を元に戻すと、目の前には見事な短剣。これが自分に投げられたのだと理解すると同時にへたりと腰が抜けそうになる。震える足を、意思の力だけで繋ぎとめ、何かを感じ取っているのか、近寄ってこようとする陛下と黒服から逃げ出そうと全力疾走する。

慌てたように光が必死に先導するのを追い越さん勢いで駆け抜けると、突然光が動きを止める。肩を上下させ、必死に息を整えながら顔を上げると、そこにはあまりにも巨大な扉が存在していた。

どう見ても自分には開けそうにないそのサイズの扉に途方に暮れ、そつと手で触れる。

「う、そ……」

ギシリ、と音を軋ませながら扉がゆっくりと開いてゆく。大の男が数人がかりでもびくともしなさそうその扉は羽より軽く、目の

ようやく落ち着いたのか、竜が鼻先をすこし離す。じっと見詰められているのに、居心地の悪さなど感じず、同じように見詰め返している、突然に脳内に低い男の声が響く。

我に、名を

どこか聞き覚えのある声で告げられたその内容に、疑問を抱かず、まるで用意された名前を辿るように口にする。

「バルドル」

其方の名は

「スイ……青木、翠」

応えた瞬間、二人を包むように風が渦を巻く。石造りの室内が破壊されるほどの力なのに、翠にはそよ風一つ吹かない。

契約は、完了した。スイ……我が、花嫁

第3話 竜と花嫁

「花……嫁……？」

是

耳にした言葉を理解できない。聞き間違えかと問いかけると肯定される。呆然としたまま目の前の巨大な竜を見詰めていると、取り巻く光たちが喜びの気配を放つ。

「私が、バルドルの、花嫁？」

どうか否定してと懇願じみた声で今度は光に問いかけるも、腹立たしいほどに元気にひよこひよこ飛び跳ねる。頭痛を堪えるように、険しい顔で黙り込んでいると、不意に目の前の竜がしおしおと項垂れる。

嫌か……？

あまりの消沈振りにすぐさま頷くことなどできず、口元が引き攣る。嫌だ。素直にそう告げてしまえばこの竜はどうなってしまうのだろうか。

だが、すでに其方は我が竜珠だ……

「竜珠？」

聞きなれない単語に、翠が問いかけると、項垂れたまま、小さく頷く。

我に名を与え、そなたの真名を告げた。これにて契約は完遂される

「知らなかった……」

呆然と呟く翠に、逆に不思議そうにバルドルが問いかける。

聞いて居らなんだか？ジークハルトより

「それ、誰？」

……

「……」

沈黙が重い。心なしか回りの光たちが今度は元気が無い。

何故、ジークハルトを知らぬのだ。我が竜珠だというに

ごめんなさい、スイが会いたくなさそうだったから。それに、僕達とだけずっと居たいって言うてもらえて嬉しくて……つい隠しちやっただ

低く重々しいバルドルの声とは違い、幼く高い声が答える。他にも誰かこの空間に居たのかと辺りを見回すが、ほかに影は無く……だが、バルドルの鼻先に光が一つ謝罪するようにしよんぼりと光っていた。

なら、スイは我が半身と出会わぬままにここに辿り着けたというのか？

僕らが連れて来たんだ。ジークハルト様とは途中出会ったけど……隠してた時だったから……

さらに光が小さくなる。このまま消えてしまふんじゃないかとばかりに小さくなり、ただ二人？の話を聞いていただけの翠が慌てて間に入る。

「バルドル、この子達は悪くないの。私が他の人に会いたくないって望んだから、隠してくれてただけ。ちゃんとジークハルトさん達にだと思っけど、私を会わせようとしたのに、それを嫌がったのは私のほうなの」

光を両手で掬い上げ、翠はじつとバルドルと瞳を合わせる。嘘偽りなど無いことを伝えるように。

「私が現れた泉の向こうでの会話を聞いてたから、貴方に会わないといけない事だけは判っていたから、すぐここに来たの」

泉……？泉の向こうということとは、其方は召喚されし者なのか？「たぶん、そう。ここは私の生きていた世界じゃないから……」

小さな声でそう告げると、慰めるようにバルドルが鼻先を寄せてくる。その心遣いが伝わり、翠がくすぐったそうに笑むと、さらにぺろりと長い舌を伸ばし、翠の頬を舐める。

「くすぐったい……ん、大丈夫だよ。この子達も、貴方も優しいから、寂しく感じる暇もないよ。……残してきた人がいたら、違

「つたんだろっけどね」

くすくすと笑っていた翠が、どこか遠い目をして告げると、バルドルが翠の頬からそっと離れる。

其方はこの世界が娘。故に彼の世界では縁えにしを繋ぐ事が出来なかったのだろっよ

「え………？」

ジークハルトと出会ってないのであれば、何も聞いては居らぬのだろう。我と契約するまではその小さき物達の声も聞こえなんだろうしな

困惑したように見上げる翠を落ち着かせるように、その柔らかな頬を再び舐め上げ、バルドルは手のひらに翠を乗せたままに、居住まいを整える。

ならば、我から話そう。この世界と、我と、其方について

第4話 リンデイル

リンデイル……そこは、竜が統べし国。国を治めるは、竜と共に生まれし者。竜を得る者はただ一人。その資格は血筋ではなく純粹なる力。竜王の力弱まりし時、次代の竜王が竜の卵を抱き生まれてくる。貴族も平民もそこには無く、生まれし竜王に皆跪く。それが唯一の王故に。

竜王とその竜は二つで一つ。魂を人と獣の姿に分かたれし存在。人でいながら空を駆ける感覚を知り、竜でいながら大地を踏みしめる感覚を知る。だからこそ、不安定な存在でもあるのだ。

竜王が自我を持つ頃には、先の竜王の姿は無く。この世に己と同じ存在は誰一人居ない。傳かれ、崇められようと、その孤独を理解できるものは無く、竜王と竜 二人は孤独に縛られる。

その唯一の救いが竜の掌中の珠、竜珠。二人の孤独を癒す唯一の存在。竜王には人が与えた名が。だが竜に名を与えることの適う同属は存在せず、その竜珠のみが名付けを行える。名を持たぬ竜はただの獣。成長するにつれ身の内より溢れ出る力の制御適わず、しだいに理性を本能に食い破られてゆく。

名を与えられる事叶えば、理性を取り戻し竜王の半身としてその力を振るう。

竜珠は、竜王と竜に分かたれている魂とただ一つ寄り添える存在。触れ合ってしまうえば自然と惹かれ合う存在。二人の孤独を受け止め、癒し、幸福を与える存在。その形は問わない。母のように包み込む愛を与える者、恋人のように添い遂げる者、幼子のように慕う者、常に傍に控え護る者。

唯一変わらぬ事は、竜に名を与え、その魂を救いし事。

「その竜珠が…私？」

是

一つ一つ、己の理解の及ばない物語のような説明に質問を投げてゆく。そうして知識を得てもなお、理解できないことがあった。

「何故、私なの」

其方が其方であるから。それ以外に無い。その姿も、その魂も。

其方の存在全てが【そう】なのだ、我には理解^{わか}る

「間違いなんてことは……」

有り得ぬ。竜珠以外が名付ける事は不可能。さらにその身に寄り添う小さき物　大地の心。其方に判りやすい言葉に例えれば精

霊のようなものだろう。それらが寄り添うは竜珠以外には無い

間違いだったら良いなんて、もう受け入れる他無いと知りつつ足掻いてみても、バルドルに一蹴されてしまう。翠が一気に詰め込んだ知識とその内容に疲れ果てたように溜息を吐くと、途端に焦ったようにバルドルの尻尾が左右に揺れる。

長く語りすぎて疲れてしもうたか

言葉と声は重々しいのに、その姿はあまりにも愛らしい。言葉で表すなら、あわあわとしか言いようのないバルドルに、翠は大丈夫だとそつとその鼻先に触れる。当たり前のようにざりとした舌で舐めてくるバルドルに今度は鼻先を押し退けながら自然と笑いが込み上げてくる。

(バルドルの支えになるのなら　良いか)

竜にとって唯一の存在であるのなら、手放されることはない。その約束が嬉しい。何一つ足場のないこの世界で、頼れるものは光…精霊たちだけだった翠にとって、揺るがない存在ほど有難いものはなかった。だが、そこまで考え　矛盾していることがあるのに気付く。

「あれ？でも竜珠って……恋人でなくても良さそうなのに、何で花嫁？」

「……………バルドル？」

「途端に黙り込んだバルドルに、言い逃れは許さないとばかりに翠は語尾を強める。」

「我に名を、与えるだけで竜珠としては良いのだ。だが……」

「そこで言い洩るバルドルに、にっこりと満面の笑みを向けると、判り難いはずの竜の表情が引き攣る。」

「バ・ル・ド・ル？」

「……………名を、ただの名ではなく、真名を相手に捧げ合うという行為が、婚姻の儀となるのだ」

「真名……………？」

「我の声が聞こえるのは、其方と我が半身のみ。それ故に我が真名を知る者はいない。だが人間にとっては生まれし時に与えられた真の名……………真名と、名乗るための名とがある。そして、その互いの真名を交換することで、真名を縛り契約と成すのだ。例えば……………ジークハルトの名を知るものは我と其方のみ。皆はそう、ジークと呼んでいたはずだ」

「その契約って、他者から教えられた場合には成立するの？」

「先ほど、バルドルはジークハルトと己は同一の存在だと言っていた。ならばジークハルトはすでに己の名を知っていて、翠もまたジークハルトの名バルドルより知っていることになる。これは互いの名を交わしたことになるのではないだろうか。」

「否。契約は互いの口から名乗ることにより成される。ジークハルトはすでに其方の名を我を通して知っている。其方もまた我を通してジークハルトの名を知っている。だがこれでは契約にはならぬ」

「よかった……………」

「安堵のあまり、バルドルの手の平に座り込んでしまう。どこか困惑したように翠を見下ろしながらバルドルはおずおずと口を開く。」

「其方は……………我が半身を厭うのか……………？」

幕間 半身 Sideジーク

「……っ!!」

「どうなされました、陛下」

いつものように、淡々と政務をこなしていたはずのジークハルトが何の前触れも無く息を呑む。滅多に感情を露にすることのない竜王の、いつにない行為に傍らに控える青年が問いかける。

「……召喚は、成功したと言ったな。セルジオ」

低く唸る様な声で問うジークハルトに、セルジオもまた沈痛な面持ちで頷く。

「はい、確かに。召喚の証として陣が確かに輝きました。ですが……結果は」

己の力不足を嘆くように、セルジオが秀麗な眉を顰め、視線を落とす。

「成功したようだ」

「……陛下、何と？」

「成功したと言ったのだ」

発言とは裏腹に、瞳を刺々しく光らせ、ジークハルトは困惑するセルジオを見据える。

「ですが、あの泉からは誰も現れなかったではないですか!」

普段の冷静さをかなぐり捨て、叫ぶように返すセルジオに、ジークハルトはただ頷く。

「今、我が半身と竜珠の姫が契約を成した」

「……………」

主の信じ難い発言に、セルジオが己の動揺を振り払うように緩く頭を振る。幾度か深い呼吸を繰り返し、現状を把握しようと思いを巡らせる。

「どうやって竜珠の姫は……竜の御許に辿り着けたのでしょうか……」

今代の姫は今までとは違っていた。

本来であれば、竜珠は竜王の傍近くに生まれ出^いずるはずの存在だった。そして導かれるように物心つく頃には竜王と出会い、その心の安寧を保つ。それを違えたことなど過去の文献にも記されていない。

だが、ジークハルトは竜珠を持たぬ唯一人の竜王であった。

どれほど竜の背に乗り世界を駆けようとも、傍にあれば必ず気付くはずの竜珠の気配を辿れなかったのだ。この世界に己の唯一の存在が無いと知った瞬間の絶望は、未だに胸の中を巣食っている。

竜もまた、時間の経過と共に自我を暴走させ、本能のままに暴れ始めたのだった。……竜珠に名を与えてもらわねばその心は全^まき形を成し得ず、獣の性のままに生きる。

半身たる竜王でさえその制御は完全とは成らず……世に並ぶ力を持つものなどない竜の狂気は懸念を産み、抑えが効くうちにと消滅を願う声さえ上がった。

己の半身を自身で葬るなど、自殺にも等しい。ただでさえ竜珠を持たぬままでは不完全だというのに、さらに残った魂を？^もぎ取るなど、有り得ない行為だった。だがこのままでは竜王でさえ竜を抑えきれなくなりそうだった。日に日に竜の瞳からは知性の光が失せ、細めた瞳孔には爛々とした殺意と破壊衝動、さらには飢餓感まで浮かべ始め　このままでは、世に甚大な被害を及ぼす事は誰もが理解していた。

だが、この世の唯一の王。代わりなど存在し得ぬ竜を殺す決断など、誰も出来なかったのだ。竜を欠いた竜王など居ない。分かれた事のないその魂は二つで一つ。一方が生を終えるとき、もう一方もまたその後を追うように衰弱して行くのだ。

いっそのこと、新たな竜王でも生まれるのであれば、ジークハルトは己を屠る行為だと知りながらも、その剣を振るうつもりであっ

た。だが一向にそのような報は届けられず、ただじりじりと竜が狂気で狂う様を見ているしかできなかったのだ。

此度の召喚が、最初で最後の機会。月の神と陽の神が一直線に並ぶその日、生涯に一度だけ己の欲するものを呼び寄せる術^{すべ}。城の書物を全て漁り、夢幻^{ゆめまほろし}の如き伝承にさえ縋った。

それが失敗に終えた時、ジークハルトは意を決した。

竜王が不在の世界がどのように歪むのかは何者も知り得ない。だが目の前の災厄を放ってしまえば世界がどうなるのかは火を見るよりあきらかだった。己の民と臣下を信じ、ジークハルトは半身を手を掛ける事を決意し、この数日少しでも被害を小さく収めようと不眠不休で執務に励んでいたのだ。

(なのに、何故……)

竜珠を得、半身の魂が歪められなかった事への安堵はある。半身を屠らなくてすむことへの感謝も抱いた。だが、それと同じくらいの強さで息が出来ぬほどに苦しい。

「我が許には現れず……半身の許へと出向いたようだ。光の

導きによって」

「竜珠の姫の傍近くに在るといふ、光珠^{ひかりたま}です、か……。ですが、光珠は竜に名を与えねば、意思の疎通は図れないはずでは……」

本来であれば、竜珠はまず竜王と出逢い、魂を触れ合わせ互いを認識する。そうして後、竜と出逢い名を与えるのが常であった。ましてや此度は界^{かい}を渡つての召喚だ。この世界の事など何一つ知りえぬ竜珠は、ジークハルトの許に召喚^よばれながらも目の前に現れようとはしなかったのだ。

痛むほどに噛み締めた奥歯の軋む音しかジークハルトには聞こえない。目の前で思考の海に沈むセルジオの眩きなど耳を通ることさえしなかった。胸を焼き尽くすのは激情。半身から伝わる歓喜を感じれば感じるほどに込み上げる妬心。彼女の姿どころか、その名さ

え竜を通じてようやく知りえたという現実が、ジークハルトを苛む。
（何故だ……何故我を拒む、翠　　っ！！！！）

幕間 重き扉 Sideジーク

「……我が竜の許へ向かう」

魂を同じくする半身と言えど、全てが伝わるわけではない。だが、今こうしている間にも沸々と湧き上がる歡喜の念。己が心と相反するその感情は、竜の身を持つ半身の感情が自然と伝わってきているものだ。ならば 竜の傍には翠の姿が必ず在る。

立ち上がりその見事な体軀を現し、ジークハルトは重厚な扉を潜る。するとすぐに、扉脇に控えていた護衛が背後に付き従う。全身を漆黒の装束に包み、見目より実を取った無骨な剣を携えた男に、ジークハルトは先を見据えたまま指示を飛ばす。

「ガイ……先の回廊の件、調査は不要だ」

「はい」

ジークハルトの言葉に何一つ言及せず、頷く。ガイと呼ばれた男は主の後を追いながら、近場にいた部下へと調査の中止を端的に伝える。これで要所に控える者たちにより、素早く末端まで意は伝わる。

剣呑な気配を放つ竜王は、常の諦観をどこかへ置き忘れた風情で、足早に求める場所へと向かってゆく。長い回廊を抜け、城の北端に存在するはただ一つ。 竜癒の間。

今となつては狂った竜を捕らえる檻と変わり果ててはいるが、そこは元来、怪我を負った竜が癒しを得るための場所だった。竜が入る事を考えて作られた他の場所よりも高い天井、厚い壁。その扉は部屋の主たる竜と、その半身たる竜王……そして、竜珠にのみ許された場所。それ以外の者が扉を開こうとすれば、大の男が数人がかりで行わねばならないほどであった。

怪我の痛みに竜が暴れても問題のないように、人気のない場所へと置かれたその部屋への唯一の回廊をジークハルトは進み続ける。

しだいに警邏する者の姿も消え、回廊にはジークハルトとガイの靴音のみがやけに大きく響き渡る。

「……………」
人のために逃えられた物ではない事が一目で判る扉の前に、言葉に出来ぬ思いを抱えジークハルトは立つ。

この扉の中には、長い年月希求していた我が竜珠が在るのだろう。未だその姿さえ掴めぬその存在。だが姿などジークハルトの前では意味を持たない。

竜珠の姫を求めるは竜王と竜の本能。この世界の誰一人代わりのいない存在。魂がこの者でなければ駄目なのだと咆哮をあげる。

（この中に……）
半身と竜珠が真名を交わし契約を成した瞬間、浮かびあがった名涼やかな異国の響きを帯びたその名の主が、今この扉の向こうにいる。名付けだけではなく、婚姻の儀を行った半身　バルドルと名づけられた竜には、翠の存在がどれほど離れていようとも理解できるだろうに、ジークハルトにはそれが適わない。その現実に歯噛みする。

（召喚が成功すれば、誰よりも先に見え　我が真名を与え、竜珠の姫が竜にするように、異界生まれ故に一つの名しか持たためである）
う姫に真名を与え……二度とその存在を失わぬよう、互いの名を交わすはずであったのに　　）

幼き頃より傍近くあれば、親愛や友愛。他の形の情を築きあげることもできたはずだが、此度の竜珠の不在。

歴代の竜王とは違い、不安と焦燥、自身と竜を苛み続けた孤独に、尋常ではなく竜珠を渴望したジークハルトにとって……穏やかな情愛。その程度のものでは飢えは満たせなかった。

恋人として、伴侶として。魂だけではなくその身をも深く繋ぎ、誰よりも己の傍近く在る存在としなければ、耐えられそうになかつ

た。

(だからこそ、この世に竜珠の姫が現れたら、誰よりも先に抱き締め、これは現実なのだ……これよりこの腕の中が其方の居場所なのだ、告げようと……)

生涯に一度だけ使える術。己の魂を賭けて求めるものをその者の許へと誘う術。求める心に僅かにも乱れがあれば、世界をも渡る力が術者に襲い掛かる。それほど危険を冒してまでも焦がれ、求めた存在。それが遂に今、すぐ手の届く場所に在る。

彼の者はどの様な姿なのだろうか……我が姿を見て、どのような表情を浮かべるのか……そして、何故、我が前に姿を見せなかったのか。何故……我では無く、竜身たる半身と婚姻の儀を交わしたのか。

何故、何故、何故。

翠に問いかけた言葉が胸で渦を巻く。交わしたい言葉が尽きることなく湧き出てくる。逸る心を微かな理性で抑え付け、ジークハルトは扉に手をかけた

第5話 竜珠と光珠

「まずは……衣食住よね」

あの城の中に居れば、どれ一つ困る事は無いだろうけど、翠にその選択肢は無かった。

光珠を身に纏い、姿を隠したままに扉から出た翠は、長い回廊の先から響く足音に、反射的に背を背け、回廊に取り付けられている窓から身を翻しその姿を眩ませた。

見知らぬ形でありながらも、美しい様式をみせる庭園に時折見蕩れながら、どれくらい続くのかわからないほど広大な庭をすり抜けて行く。本当なら、この世界の衣服をこっそり借りてしまおうかと思いはしたものの、断りも無く借りる事への抵抗感と。何より置いてある場所がわからなかったのだ。

言葉が通じるようになったとはいえ、精霊のような存在の光珠にとって、城事情など興味も無いわけで。かといってそこらを歩いている人を昏倒させて服を奪うには翠の良識が邪魔をする。

諦めて城の外へと出ようとしてみれば……今度は光珠は良い水先案内となった。方向もわからない翠の前を、もはや役割となってしまったのか見慣れた大きさの光珠がほわほわと楽しそうに漂う。

「あなた達に名前は無いの？」

可愛らしい姿に微笑みながら、人気が無くなったのを見て、翠は問いかける。

ないよ。僕達は僕達だよ。光珠っていうのも、いつの間にか呼ばれてたんだ

当たり前のように、くるくると翠の周りで戯れながら告げる光を、翠は指先でつん、とつつく。

「なら、私がつけてもいい？」

スイが名前つけてくれるの？僕達に？

驚いたのか、翠の周囲に張り付いていた光の一部までもが離れ、ぴよこぴよこと慌しく光りはじめる。

「そう、これからもずっと傍にいるんだから、やっぱり名前を呼びたいし……駄目かな？」

光珠、そう呼ぶのはまるでバルドルだったら竜。翠だったら人間。そう呼んでいるようで嫌だったのだ。

首を傾げて問いかけながらも、どこか不安そうな翠に、光珠が慌ててわらわらと翠に纏わり付く。

違う、驚いただけ！嬉しい、嬉しい、嬉しい

誤解されたくなくて、必死に喜びを表しながらも、光珠は忙しなくその色を薄紅と銀色、交互に変えてゆく。名前もだが、何より翠がこれからもずっと傍にいてくれると言ってくれたのが嬉しい光珠だった。

竜珠の傍にはいつでも光珠があった。数だけはあるものの、一つ一つは小さく、その力は寄り集まっても大して強くない。竜珠の姿を隠したり、その身をほんのちよつとだけ移動させたり。竜珠が居ないときはただ辺りを彷徨うだけの存在でしかない光珠にとって、精一杯頑張っても、ほんの一瞬痺れさせるくらいに力しか持たないのだ。

だけど、光珠は竜珠に惹かれる存在。性格や姿は様々でも、どの竜珠も、その魂だけは澄みきっていた。人の入れぬ光珠の世界。その中心に位置する泉。その泉の水のようにどこまでも透明な魂。その心地よさに自然と引き寄せられてしまうのだ。

今までの竜珠は、幼い頃から光珠がいるのが当たり前で、その存在があるのは息をするのと同じ、当たり前のものであった。そして……空気のように、語りかけてくる者は少なかった。ただ傍で、いつも楽しそうに光っている存在とでも理解していたのだろう。

翠は、声を掛けてくれた。ずっと傍にしようと言ってくれた。自分達を望んでくれた。まるで、竜に与えた時のように　名前を、くれると言ってくれた。

嬉しくて、嬉しくて。光珠は幸せに全身を染めながら翠を取り巻く。

「コウ　って、どう？」

私のいた世界で、光ってコウとも読むのよ。安直だけどね、とそう言ってまた微笑む翠に、光珠は、また薄紅に染まる。

そんな会話を繰り返しているうちに、庭園にも終わりがやってきた。少しずつ感じる人の気配。口を嚙み、今まで以上に人で賑わう回廊沿いに進むと、巨大な壁が立ち塞がる。ぐるりと周囲を囲む壁の一部に取り付けられた扉には、銀色の甲冑を身に纏い、扉を護る者たちと、通行証らしきものを確認してもらい、城へ出入りする人々の姿があった。

今まで以上に慎重に、人に触れないように注意しながら、翠はその城門を潜り抜ける。

『我が半身を厭うのか』　その言葉を否定できなかった、重い心と共に

第6話 過去

其方は……我が半身を厭うのか……？

困惑も露に問いかけたバルドルの問いが、今でも頭を離れない。厭うほどにバルドルの半身の事など知らない。けれど……泉越しに出会った男。一度擦れ違った時に、陛下と呼ばれていた男。あの存在が、竜王と呼ばれるものなのだと、とうに理解していた。

苦しそうな表情を見ると、大丈夫だよと頬を撫で、抱き締めたいと自然に思った。耳に響く声は……低く、心地良く。傍でいつまでも聞いていたいほどだった。

(だけど……厄介ごとは、お断りしたいのよね)

唯一無二の存在？竜王陛下？誰もが膝を折る？それだけでも面倒そうだが　翠が一番厄介に感じているのは、己の心だった。

危険な空気を感じるのだ。全身で自分に好意を向けてくるバルドル。騙まし討ちのように真名を交わし、婚姻の契約をしてきたバルドル。そのバルドルの半身……。

(捕まったら、逃がしてもらえない)

ぞくぞくと背筋を寒気が走る。最早これは生存本能に近いものだった。さらにそれはもう一つの事柄も理解していた。

「そして……捕まったら、私自身　逃げ出せない……」

最初に抵抗なく受け入れることのできたのは、コウ達だった。見知らぬはずの存在なのに、ただ可愛らしい、愛しいと心から思えた。そして、バルドルと出逢い　相手は恐ろしいほど大きな竜だといふのに……恐れではないもので心の奥底が震えた。

頭ではなく、心で。この存在が自分にとって、とても大切なもの

だと全身で感じた。

だけど、それを素直に受け入れられたのは……彼らが人では無かったからかもしれない。

今まで、翠が心を傾けた人達は皆、翠の手をすり抜けていった。優しくかった父母は幼い頃に亡くなり、泣きじゃくり、暴れる翠をそっと抱き締めてくれた祖母も、高校の卒業を待たず失った。

あまり会話の無かったとはいえ、最後の肉親であった祖父も翠の成人を待たず、この世を去った。

一番心を許せる家族を次々と失い、失う事に慣れてしまった。孤独な生活は、一人で笑う事もなく……普段表情を動かさないせいか、たまに浮かべた笑顔さえ、どこかぎこちなくなってしまうた。

そんな翠の手を取ってくれた人がいた。上手く笑顔を返せない翠を受け入れてくれ、寂しさを埋めるように傍に寄り添おうとしてくれた。

拒絶を繰り返す翠に呆れる事無く傍にいてくれるその人に、少しずつ、少しずつ。頑なだった翠の心が解きほぐされていこうとした時、前に付き合っていた彼女という人物が二人の間に立ちはだかった。

最初は、困ったような顔をしていた彼の心が、泣きじゃくる少女の姿を前にゆっくりと離れて行くのを、翠はただ見ている事しかできなかつたから。

手を伸ばして、捕まえて、その先は？

自分はまた、手にした大切な人を失ってしまうのかもしれない。自分が相手を好きであればあるほど早く、その存在は翠の前から消えていった。だから、離れようとするその手を掴むことに怯えてしまった。

離れようとするその手を掴み、引き戻してしまえば父母のように、

その存在ごと失ってしまうかもしれないから

こちらの世界の存在するべきだったから、元の世界では深い絆を繋ぐことができなかった。だから、今は繋ぐことができるのだとバルドルに言外に告げられようとも、そうですかとすぐに受け入れられるわけがない。

自分が大切に思えば思うほど、その人たちは自分から離れていった。その思いは翠の中から容易く拭う事などできはしない。だけど、それがヒトでなければ？

独りは、寂しい。独りは、辛い。言葉にしてみれば至極単純なそれは、底知れない不安を翠に齎もたらしていた。これ以上、失いたくないならば、失うことの無い存在が欲しい。そんな、ありえない存在が、どうぞとばかりに目の前に差し出された。

欲張って何もかもを手にしてしまっても、自分の小さな腕では抱えきれない。ならば、ほんの僅かな存在を大切に、大切に、全身で愛そう。

コウとバルドルとの出逢いを果たし、翠はもう十分すぎると思っていた。

(だから 面倒なことになる前に、逃げる)

竜王。バルドルとその魂を分け合う存在。けれど翠にとってはジークハルトは人間にしか見えない。ヒトであれば………失ってしまうかもしれない。だから、大切だと自分が思ってしまう前に、その前から姿を消してしまおう。

バルドルと同じ魂を持つのなら、きっと私は一瞬で惹かれてしま
う。

そうになったら、失う恐怖を何時までも抱え、傍にいないことになる。

臆病な自分を嫌というほど自覚している翠は、そんな厄介な己の心を抱えることなど出来はしないと、きちんと出会ったこともない存在を求める自分の心に鍵をかける。

今でも鮮明に思い出せるジークハルトの顔を振り払いながら、翠はしだいに遠ざかる城門に別れを告げた。

第7話 見慣れぬ町並み

目の前に広がる、真つ直ぐな路。^{みち}
広く、平たく整備されたそれを見て、翠はこの国の豊かさを初めて実感した。

主要な通りが整備されている事は多々あれど、左右に走る細い路地にさえ平らかな石畳で覆われ、石が剥げていたりしている様子は少ない。

町並みにも統一感があった。頂に赤い煉瓦。窓にはめ込まれた装飾は艶やかな黒。細工は精緻^{せいぢ}なものから簡易なものまで幅広くあれど、遠くから見て受ける印象は似通っていた。

その国の文化や好みもあるだろうか、見事なまでに整然とした町並みは数十年で作られられたものでは無い事くらい、翠にも理解できる。

「豊かね……」

周りを飛び交う活気溢れる声には暗さがなく、弾けるような明るさを持っていた。その声に背を押されるように呟く翠に、光珠は嬉しそうに跳ねる。

よその国みたいに、争いなんてないから、皆元気なんだ！

「争いがないってどういうこと？」

だって、竜王も竜も、他にはいないから、争っていちばんを奪いあう必要なんてないんだよ

「ああ……そういうことね」

身内同士の争い。他国からの干渉を除けば一番の敵は身内だろう。だけど、竜王となれる存在が1人しかいないのなら……それが血縁を必要としないのなら、争いは格段に減るだろう。

さらに、この世界において竜を超える生物など、居ないのではないだろうか 逆らう者など無いほどに。

スイ、スイ！いっぱい人いるところに着いたよ

町並みを眺めながら歩を進めていた翠は、光珠の声に意識を引き戻される。はっとしたように辺りを見渡すと、一際賑わう一角に辿り着いていた。

自分が求めていた場所だと、翠は小さく頷き近くの路地を奥へ奥へと進んで行く。大通りの喧騒は届くものの、一目が途絶えた瞬間に、翠は身に馴染んでいた光珠の覆いを散らす。

人目を引くのは避けたいけれど、姿を現さなければ何一つ出来はしない。人目につく衣服を早々に処分したいものの、それには先立つ物が必要だ。

(まずは……職)

出来れば知識があまり必要でない所。この世界での人間社会の常識など皆無なのだ。これに関しては竜も光珠も頼りにできない。さらには……住み込み可能な所。

そこまで考えてあまりの無謀さに頭痛がしてきた。誰が見慣れぬ衣服を纏い、どう見ても事情がありそうな人間を容易く雇い入れる訳が無い。人の良さそうなタイプに切々と頼み込むしか術は無いのだ。

ここまで歩きながら多くの人々を見てきたが、色彩は問題ないようだった。金髪や赤毛などの異なる色も多いが、黒髪の者もそれなりにいた。ただ、幾分顔立ちは異なっていた。僅かにこちらの人々の方が彫りが深い。翠は幸い日本人にしてははつきりとした目鼻立ちをしていた為、少々の違和感はあるだろうが奇異にうつるほどではないだろう。

(一番の問題は……表情)

光珠と共にいたおかげで、強張りきつた頬も柔らかさを思い出し、自然な笑みを浮かべる事ができてはいるが……ヒトの前で、上手く表情を作れるか。

失う事を恐れるばかりに、他人に近寄ることも 近寄ってこられることも、避けるのが常だった。無意識に壁を築きあげ、感情を浮かべる事ができないのだ。

(あれは 受けが悪いのよね)

そんな自分が唯一できた表情は、営業スマイル。社会人になってしまえば、円滑に業務を行うために無理やりにも笑顔を浮かべなければならなかった。

仕事だと思えば自然と笑顔が浮かび上がる それが、形ばかりを取り繕った、上辺ばかりのものでしかなくとも。

目を細め、口元をきゅっと引き上げる。そうすればぱつと見は笑顔に見えるのだ。だけど、やはりそれは自然なものではないのだろう。自然と皆一線を画して翠と接してきた。

だが、そんな笑顔でも無いよりはマシだろう。能面のように無表情を張り付けた怪しい女と、営業スマイルで固めている怪しい女。どちらも怪しいことには限りないが、無表情よりは笑顔のほうがまだ良い気がする。

「さ、行くっ」

パシリと両手で顔を軽く叩き、気合を居れ笑顔をその上に乗せる。不自然だと翠が思っているその笑顔は、元来の顔立ちもあり、美しいものだった。だが、それ故に他者には近寄りがたい気持ちを与えていた。

けれど、そんなものは時間と共に慣れてしまう。周りが近寄ってこなかったのは その近寄り難さ以上に、翠の拒む空気にあつたのだと、未だ翠は気付くこともしない。

今もまた他人と関わろうとしていくのにも関わらず、自然と他者を拒む空気を放ちながら、翠は喧騒に紛れるように一歩足を踏み出した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7454y/>

召喚されてみたものの

2011年11月30日00時56分発行